

の心也  
 九汗ながるゝ也  
 二眞向にはいそ  
 三清少の恥ぢた  
 四心、顔色に  
 五見ゆらんこ  
 也  
 三伊周立ち給へ  
 かしこ也  
 一四清少のかほを  
 かくしたる也  
 五伊周の立ち給  
 はぬ也  
 六勿論也、清少  
 の恥づらん宮  
 のおしはかり給  
 ふ也  
 七清少心也  
 八伊周の詞也、  
 九これへ給はれ  
 也  
 五后宮の詞也  
 三伊周の詞、清  
 少をうごかさじ  
 也

たるぞ」と聞えさせ給ふを、嬉しと思ふに、「給ひて見侍らん」と申し給へば、「猶こ  
 こへ」との給はずれば、「人を捕へて立て侍らぬなり」との給ふ。いと今めかしう、  
 身の程年には合はず、傍痛し。人の草假名書きたる草紙取り出でて御覽す。誰か  
 にかあらん。かれに見せさせ給へ。それぞ世にある人の手は見しりて侍らん」と、  
 怪しき事どもを、只應へさせんと給ふ。

○さぞと申すにこそあらめ——是は元輔のむすめの清少納言、新參の由を申す  
 なるべし。  
 ○まことにさありしなど——眞實に清少を思ひてありしと、の給ひたはむれ給  
 ふなるべし。前に女房にそぞろごとなどの給ひかゝると有りし首尾なり。  
 ○行幸など見るに——年來行幸など見し折に、伊周公供奉にて清少の物見る車  
 を見おこせ給ひしきへ、顔かくしなどせしとの心也。  
 ○おほけなくいかで立ち出でにし——かくはづかしき所へ、おほけなくも、宮  
 仕へに出でにしよと恥しさに思ふ也。  
 ○かしこきかげとささげ——我影かくすかたじけなき蔭と頼みたる扇をも伊周  
 公の取り給ふ也。  
 ○ふりかくべきかみの——扇はとらるゝ。せめて面がくしに髪をふりかけんも  
 見ぐるしからんとおもふと也。

この心也  
 三清少也  
 三伊周の詞、誰  
 が手跡ならん、  
 清少にみせ給へ  
 也  
 一花やかなる也  
 二猿樂也、ざれ  
 三物をほめ笑ひ  
 也  
 四のちにはさも  
 うひうひしす  
 也  
 五宮仕へに出で  
 めし時の事也  
 六清少のこきく  
 はづかしからん  
 也  
 七面馴見なるゝ  
 心也

○あふぎを手まさぐりに——清少の扇を伊周の手まさぐり給ふ也。  
 ○しろいものうつりて——清少の汗に白粉ながれてからぎぬにうつる心也。  
 ○これ見給へ、これはたが書きたる——清少のために伊周をたたせ給はんとて  
 此繪を見給へと后宮のの給ふ也。  
 ○いといまめかしう——清少いま卅歳ばかりにや有りけん。かやうのいまめか  
 したはぶれは、年齢にも身のほどにも相應せずと也。  
 ○人のさうがななきたる——草假名。かの后宮の見せ給へる繪草紙の事也。  
 一所たにあるに、又さき打ち追はせて、同じ直衣の人參らせ給ひて、これは今少し  
 花やぎ、さるがう事などうちし、譽め笑ひ興じ、我も何がしとある事かゝる事な  
 ど、殿上人の上など申すを聞けば、猶いと變化の物、天人などのおり来るにやと覺  
 えてしを、侍ひ馴れ、日頃過ぐれば、いとさしもなき業にこそ有りけれ。かく見る  
 人々も、家の内出て初めけん程は、さこそは覺えけめど、かくしもて行くに、おの  
 づから面馴れぬべし。

○おなじなほしの人——山井大納言歟。中納言隆家卿なるべし。  
 ○われも何がしとある事——此詞上に連續せず。若しくは落字などあるにや。  
 但しひて義をとり侍らば、われも何がしとある事とは、彼同じ直衣の人も人  
 の上のとありかゝりを申さるゝ也。殿上人の口をもとりませ申さるゝをきけ



一是より后宮の清少へ仰せられし事也  
 二清少の御返事申すにさしあはせて也  
 三妬む者のわざさせしなるべし  
 四后宮の御詞  
 五清少心也  
 六大かたにも思ひ奉らぬ也  
 七折ふしきかしらにはなひたるをにくめる也  
 八はなひる事をいめほ也  
 九后宮の御前にて咒咀せしやうなれ也  
 十新參の時なれば、彼咒咀する人のわざなごも申しあけざりし

ば、清少のうひうひしき心には、變化の物天人などやうに覺えしと也。  
 ○かく見る人々も——后宮の御かたに侍る女房達をさしていふ也。  
 物など仰せられて、「我をば思ふや」と問はせ給ふ。御應へに、「いかにかは、」と啓するに合はせて、臺盤所のかたに、鼻を高くひたれば、「あな心う。虚言するなりけり。よし／＼」とて入らせ給ひぬ。争てか虚言にはあらん。よろしうだに思ひ聞えさすべき事は。鼻こそは虚言しけれと覺ゆ。さても誰か、かく憎き業しつらんと、大かた心づきなしと覺ゆれば、わがさる折も、おしひしぎ返してあるを、まして憎しと思へど、まだうひ／＼しければ、兎も角も啓しなほさて、明けぬればおりたる即ち、淺緑なる薄様に、艶なる文を持て來たり。見れば、  
 「いかにしていかに知らましいつはりを空にただすの神なかりせば」  
 となん。御けしきは」とあるに、めでたくも口惜しくも思ひ亂るゝに、猶よべの人ぞ尋ね聞かまほしき。  
 「うすきこそそれにもよらぬ花故に、うき身のほどを知るぞ佗しき  
 猶こればかりは啓し直させ給へ。職の神もおのづからいとかしこし」とて、參らせ  
 て後も、うたて折しも、などてさはたありけん、いとをかし。  
 ○いかにかはとけいするに——いかにかは思ひ奉らざらんと清少の申し上ぐる也。

也  
 二御前より局におりし也  
 三后宮の御文也  
 四后宮の御うた  
 五右筆の御うた  
 六后宮の御けしきは如此といへる詞也  
 七五かのはなひし人は何人ぞききたき也  
 八清少返歌  
 九此偽の御事は申し直して給へし、取次の人に申す也  
 十元のろひ神もおそろしき也  
 十一是も彼もはなひしをあやしむ詞也

○だいはん所のかたに——后宮の御かたの臺盤所女房の侍なり。  
 ○そらごととするなりけり——清少思ふとは偽ならん。隣にはなひつればとの御たはむれ也。清輔奥義抄云、人の事を思ひくはだつるに、はなひつればならずと云云。さやうの心にて、后宮もかくの給へるにや。毛詩邶風篇、願言則嚏。註ニ今俗人嚏云人道我。此古之遺語也云云。  
 ○わがさる折もおしひしぎかへしてあるを——尋常にも人の嚏つれば、其はなひ返してある物をと也。人のはなひたる時、又はなひ返さねば、わるき事有りと世俗にいひならはす事のゆゑなり。  
 ○いかにしていかに——清少の思ふといふを偽ならずと、いかにしてしらん。若し偽を糺の神あらばこそ知るべけれとの心也。大和物語異本に、「偽を糺の森のゆふだすきかけてをちかへ、われをおもはば」  
 ○めでたくも口をしくも——后宮の仰せは辱くも、又彼はなひしゆゑに偽なども給へば口惜しくもと也。  
 ○うすきこそそれにも——花を嚏にそへて也。薄き思ひこそはかなき嚏などにも妨げらるべけれ。是は眞實にて、それらの咒咀にもよるまじき事故に、かく偽と思し召さるるは、うき身の不幸思ひしられて佗しきと也。  
 ○しきの神もおのづから——職の神也。咒咀などにて災難をなす神也。宇治拾



一 慢したる心也  
 二 最初  
 三 あらそふ也、  
 藏人四人の内關  
 ありてあまた望  
 み争ふ也  
 四 懸召也  
 五 其年關ある中  
 に、第一の國を  
 受領したる也  
 六 答に也  
 七 よき人のむす  
 めを、これかれ  
 あらそひ望みし  
 中にも  
 八 調伏也  
 九 驗者也  
 一〇 掩韻也  
 一一 疾也  
 一二 三小弓の勝負に  
 相手のさまぐ、  
 まぎらはし妨ぐ

遺に少將なりける人の、しき神にふせられて安倍清明に加持せられし事あり。  
 又清明もしき神つかへる事など有り。

百六十四

したり顔なる物 正月一日のつとめて、最初に噓ひたる人。きしろふたびの藏人  
 に、かなしうする子なしたる人のけしき。除目にその年の一の國得たる人の、喜び  
 など言ひて、「いとかしこうなり給へり」など人の言ふ應へに、「何か。いと異様にほ  
 ろびて侍るなれば」など言ふもしたり顔也。又人多く挑みたる中に、えられて婿に  
 取られたるも、我はと思ひぬべし。こはき物怪調じたる驗者。韻塞きの明とうした  
 る。小弓射るに、片つ方の人、咳をし紛はして騒ぐに、念じて、音高う射て中てた  
 るこそ、したり顔なるけしきなれ。碁を打つにさばかりと知らで、ふくつけさは、  
 又、こと所にかぐりありくに、異方より目もなくして、多く拾ひ取りたるも嬉し  
 からじや。誇りに打ち笑ひ、唯の勝ちよりは誇りかなり。ありく、受領に成  
 りたる人の氣色こそ嬉しげなれ。僅にある従者のなめげに侮づるも、妬しと思ひ聞  
 えながら、いかがせんとて念じ過しつるに、我にも勝る者どもの畏まり、只仰せう  
 け給はらんと追従する様は、ありし人とやは見えたる。女房打ち使ひ、見えざりし  
 調度、装束のわき出づる。受領したる人の中將になりたるこそ、もと君達の成りあ

る也  
 三 的に矢の音の  
 たかき也  
 四 おのが手前に  
 さらる、所あり  
 さらで也  
 五 イ、き  
 六 うれしからん  
 七 心也  
 八 七したりがほな  
 る心也  
 九 久しくならで  
 受領したる也  
 一〇 元受領ならぬ  
 已前の事也  
 一一 イも  
 一二 無禮也  
 一三 受領ならぬ  
 さきとは格別  
 也  
 一四 三今までなかり  
 し女房も有る也  
 一五 受領也  
 一六 是より位のも  
 でたき事をつい  
 でにいふ也  
 一七 叙爵せし人を  
 云ふ也  
 一八 毛ほむることほ

がりたるよりも、け高うしたり顔に、いみじう思ひためれ。位こそ猶、めてたき物  
 にはあれ。同じ人ながら、大夫の君や、侍従の君など聞ゆる折は、いと侮り易き物  
 を、中納言、大納言、大臣などになりぬるは、無下にせん方なく、やんごとなく覺  
 え給ふ事のことなさよ。程々につけては、受領もさこそはあめれ。數多國に行き  
 て、大貳や四位などになりて、上達部になりぬればおもおもしろ。されどざりとて程  
 過ぎ、なにばかりの事かはある。又多くやはある。受領の北の方にてくだるこそ、  
 よろしき人の幸には思ひてあめれ。只人の上達部の女にて、后になり給ふこそめ  
 であけれ。されど猶男は、我身のなり出づることめでたく、うち仰ぎたる氣色よ。  
 法師の何がし供奉など言ひて歩くなどは、何とかは見ゆる。經尊く讀み、みめ清げ  
 なるにつけても、女に侮られて、なりかかりこそすれ。僧都、僧正に成りぬれば、  
 佛の現れ給へるにこそと覺し惑ひて、畏まる様は、何にかは似たる。

○したりがほなる物——イ本ニ此奥の上達部はといふより、春宮の御母女御とい  
 ふ迄を書きて、其次に此題以下あり。  
 ○正月一日のつとめて——世俗に、元日噓るは長命の相といへば也。袖中抄云  
 四分律云、時世尊噓、諸比丘咒願言ニ長壽。今案今俗正月元旦若早且噓即稱曰ニ  
 千秋萬歲急急如律令ニ是緣也。何只在三元日一哉。尋常禱之。  
 ○何かいとことやうにほろび——受領は、朝廷奉公の志ある人は本意とせず。



也  
 元格別々の心也  
 元宰相になるな  
 り、宰相以上を  
 上達部云ふ也  
 三受領はかぎり  
 ありて、ほごに  
 過ぎてさまでの  
 事なし也  
 三大貳四位にな  
 りて、公卿にな  
 るはまれなり也  
 也  
 三よきさいはひ  
 とする心也  
 三女の後になり  
 給ふより、猶男  
 のなり出たるは  
 したりがほなる  
 也  
 三よきまでもなき  
 心也  
 三形懸りばかり  
 こそつくるへ何  
 のかひなし也  
 三よき人々も尊  
 敬のさま也

然れども所務徳分に付きて望む也。されど何か賢からん、異様に亡びて外國に  
 沈淪するものをなど、口にはいへど實は満足の心あるさま也。  
 ○みふたぎの明とうしたる——掩韻。孟津抄云、古集の詩の韻字をふたぎて何  
 の字と推して勝負をする也。其何の字と推しあてたるを明と云ふ也。  
 ○ねんじて音たかり——まぎらはされずよくこらへたもちたる心也。  
 ○ふくつけきは——細流云、食る也。愚案慾がましき心也。遊仙窟食生フクツ  
 ケビトとよめり。  
 ○かゝぐりありく——かゝづらふ事也。おちくぼ物語三云、かゝくりよる云云。  
 おなじ心也。  
 ○わづかにあるずんぎ——従者也。日頃頼りなかりし程は、無禮しあなづりし  
 従者のねたかりしも、せんかたなくて過しつるに、受領に成りて後は、従者も  
 誰も追従する心也。  
 ○見えざりしてうど——なかりし道具衣裳なども、俄に出来るをわき出づると  
 いふ也。調度はつかふ道具也。  
 ○もときんだちのなりあがりたるよりも——元來の公達也。公達とは、攝家大  
 臣の息ならでも、近衛の少將、中將を経て、納言以上にのぼる人々をいふ也。  
 清華、英雄とも申す也。さやうの人々より受領の中將になりしはしたりがほな  
 ると也。

一イ、あまかぜ、  
 尤可然歟

○中納言、大納言、大臣——公卿也。大臣を公といひ、納言は卿也。  
 ○ずりやうもさこそは——受領も大上國の守になりしはこよなしとの心也。  
 ○あまた國に行きて——一任四ヶ年の國守を経て、あまた他國に行きて合格の  
 人をいふ也。  
 ○大貳——大宰府のおほい介也。相當四位也。大宰のかみは帥也。帥は大かた  
 親王の任官にて、筑紫に下り給はず、府務をおこなはざれば、大貳、帥にかは  
 りて筑紫に下りて大宰府の務をおこなふ故に、規模とする官也。  
 ○四位——受領は大かた五位なれば也。  
 ○何がし供奉など——内供奉にや。安惠内供奉、寛算内供奉のたぐひ也。官職  
 便覽云、寶龜三年三月始置内供奉十禪師云云。續日本紀にあり。又延喜式に  
 毎年正月に大極殿にて最勝王經講説の時、内供奉十禪師を講師とする事あり。  
 十禪師とは十人の事也。  
 ○僧都僧正に——僧も位高くなればしたりがほなるとの心也。

百六十五

風は嵐。木枯。三月ばかりの夕暮にゆるく吹きたる花風、いとあはれ也。八九月ば



二 汗もかわき也  
 三生絹也  
 四 夏あつかりし程也  
 五 格子也  
 六 颯也

かりに、雨にまじりて吹きたる風、いとあはれ也。雨のあし横様に、騒がしう吹きたるに、夏とほしたる綿衣の、汗の香など乾き、生絹の単衣に引き重ねて着たるもをか。此生絹だに、いと暑かはしう捨てまほしかりしかば、いつの間にか成りぬらんと思ふもをか。曉、格子、妻戸など押しあげたるに、嵐のさと吹き渡りて、顔にしみたるこそ、いみじうをかしけれ。九月晦日、十月一日の程の空うち曇りたるに、風のいたう吹くに、黄なる木の葉どもの、ほろ／＼とこぼれ落つる、いとあはれ也。櫻の葉、棕の葉などこそ落つれ。十月ばかりに、木立多かる所の庭は、いとめでたし。

○夏とほしたるわたぎぬ——一夏過したる綿絹也。  
 ○いつのまにか成りぬらん——八九月の風の冷やかなりしをおどろく心也。

○かほにしみたる——顔に寒き心也。文選宋玉風賦云、其風中人狀直儼淒淒慄慄。  
 ○むくの葉——棕。一名即椶。和名牟久。

百六十六

野分の又の日こそ、いみじう哀に覺ゆれ。立部、透垣などの伏しなみたるに、前栽

ニイ、よろこび  
 三木の枝の這ひ伏す也  
 四 萩女郎花をそこなひて、心づきなき心也  
 五 颯也  
 六 實法なるさま也  
 七 こよひ野分のゑねざりし故、朝ねたる也  
 八 母屋  
 九 又他の女房也  
 一〇 残暑のころの衣服也  
 二句  
 三句  
 三 薄紅のよるの物也  
 四句  
 五 根ながら草花の折れたる也  
 六 此くさ花はかうかうすらめなごおしはかる也

ども心苦しげ也。大きな木ども倒れ、枝なども吹き折られたるだに惜しきに、萩、女郎花などの上に、よろほひ這ひ伏せる、いと思はず也。格子の壺などに、さときはを殊更にしたらんやうに、細々と吹き入れたるこそ、荒かりつる風の仕業とも覺えね。いと濃き衣のうはぐもりたるに、朽葉の織物、うす物などの小袷着て、まことしく清げなる人の、夜は風の騒ぎに寐覺つれば、久しう寝おきたる儘に、鏡うち見て、母屋より少しるざり出でたる。髪は風に吹きよはされて、少しうちふくだみたるが、肩に懸りたる程、誠にめでたし。物哀れなる景色見る程に、十七八ばかりにやあらん。ちひさくはあらねど、態と大人などとは見えぬが、生絹の単衣のいみじう綻びたる、花もかへり濡れなどしたる、薄色の宿直物を着て、髪は尾花のやうなる殺ぎ末も、たけばかりは衣の裾に外れて、袴のみあざやかにて、そばより見ゆる、童の若き人の根ごめに吹き折られたる前栽などを、取り集め起し立てなどするを、羨ましげに押し量りて、つき添ひたる後もをか。

○野分の又の日——八月の比ふく暴風也。其明る日の景氣を書く也。源氏のわきの巻も是をかけり。  
 ○たてじとみすいがい——立部。透垣。  
 ○ふしなみたるに——野分に吹きたふされて伏し双びたる也。  
 ○おほきなる木ども——文選風賦云、蹙石伐木梢二殺林莽。



○からしのつぼなどに——格子のひと間ひと間を坪といふにや。こまぐと吹き入ると次の詞にあり。此段の風の形容は、莊子が天籟を論じたる詞にをさきおとるまじくや。

○いとこきまぬのうはぐもり——こき紅のうへのくろみたる也。

○ねざめつれば——イ本ねられざりつれば云云。

○うちふくだみたる——髪のをそけたる也。源氏におほき詞也。

○物あはれなるけしきみる——其女房の野分の朝の草花のをれふして、哀なるを見ゐるほどに也。

○花もかへりぬれなどしたる——かの生絹の單の縹いろなるが色さめて、野分のしぶきにぬれたるさまなり。

○たけばかりはきぬの——髪長くて居長ほどきぬのすそにあまりし也。

○そばより見ゆる——彼物哀なるけしき見る女房の、傍より此十七八の女房の見ゆる也。

○うらやましげに——かの童のわかき人と諸共にせまほしげなる也。

○うしろもをかし——童のうしろ也。彼わかき女房のうしろもこめていへり。

百六十七

一 主さおほしき女のこと也  
 二 是女房なるべし  
 三 御膳進むる也  
 四 女房のきぬの打ちたる也  
 五 さわがしからぬ也  
 六 女房のきぬの上にかみのかりさま也  
 七 后宮ほごの御かた也  
 八 帽額也  
 九 鈎也、籠のつりほり也  
 一〇 あざやかなる也  
 一一 調也、こしらへし也  
 一二 稀歟、或は階のことにや  
 一三 外也  
 一四 碁石  
 一五 碁筒也  
 一六 碁子也、縁也  
 一七 目覺したる也

心憎き物 物隔てて聞くに、女房とは覺えぬ聲の、忍びやかに聞えたるに、答へ若やかにして、うちそよめきて參るけはひ、物參る程にや。箸、匙などの取りまぜて鳴りたる。提子の柄の倒れ伏すも、耳こそとどまれ。打ちたる衣のあざやかなるに、騒がしうはあらで、髪の振りやられたる。いみじうしつらひたる所の、大殿油は參らで、長炭櫃に、いと多くおこしたる火の光に、御几帳の紐のいと艶やかに見え、御簾の滑額のあげたる、鈎のきはやかなるも、けざやかに見ゆ。よく調じたる火桶の、灰清げにおこしたる火に、よく書きたる繪の見えたるをかし。箸のいときはやかに筋かひたるもをかし。夜いたう更けて、人の皆寝ぬる後に、外のかたにて、殿上人など物言ふに、奥に碁石、筒に入る音のあまた聞えたる、いと心憎し。碁子に火點したる。物隔てて聞くに、人の忍ぶるが、夜中などうち驚きて、言ふ事は聞えず、男も忍びやかにうち笑ひたるこそ、何事ならんとをかしけれ。

- はし——筋、ハシ。箸、同。一名、扶提。和名にあり。
- かひ——飯匙。眞名伊勢物語、和名云、説文云、匕所ニ以取飯也。一名匙カ
- イ。
- ひさげのえ——提柄。

百六十八



一 八雲、陸奥  
二 陸奥  
三 未勘

島は 浮島。八十島。たはれ島。水島。松が浦島。籬の島。豊浦の島。たど島。

○うきしま——奥州しほがまの邊也。新古今に、「しほがまの前にうきたるうきしまのうきて思ひのある世なりけり」

○やそしま——八雲云、清輔云、出羽にあり云云。普通には只八十島也。愚案、業平の小町が髑髏を見しは出羽の八十島也。小野篁の八十島かけてとよみ給へるは、只おほくのしまといふ義也。

○たはれしま——八雲云、肥後。清輔抄ニハ相模云云。

○みつ島——八雲筑前。萬葉或三島とも、蘆北の野坂の浦に舟出して水島にゆかん波たつなゆめ

○とよらの——豊浦島。八雲長門。

百六十九

一 奥州也  
二 吹上、八雲  
紀伊  
三 未勘

濱は 一 そのの濱。二 吹上の濱。長濱。打出の濱。もろよせの濱。千里の濱こそ廣う思ひやらるれ。

○ながはま——八雲、伊勢云云。

○うちでの——打出濱。八雲 近江。

○千里の濱——伊勢物語紀の國の千里の濱にありける云云。チリのはまとよ

む歟。

百七十

一 奥州也  
二 近江也  
三 紀伊也

浦は 生の浦。鹽竈の浦。滋賀の浦。名高の浦。こりずまの浦。和歌の浦。

○おふのうら——生浦也。八雲 伊勢。古今大歌所の歌いせ歌によめり。

○なだかの浦——八雲 遠江云云。萬葉には、きの國のなだかのうらとよめり。

○こりずま——攝津也。八雲に云はく、須磨。こりずまの浦とは同所也。但別なるやうにいふ人もあり云云。

百七十一

寺は 壺坂。笠置。法輪。高野は、弘法大師の御住みかなるがあはれなる也。石山。粉川。滋賀。

○つぼさか——和泉の法華寺也。又は壺坂寺といへり。本尊は千手観音也。道基上人建立と拾芥に有リ。

○かさぎ——笠置寺、大和にあり。本尊は彌勒解脱上人の寺也。

○ほうりん——嵯峨の法輪寺也。僧都道昌一日宴座せらるるに、虚空藏菩薩衣の袖の上に現じ給へり。道昌すなはち袖をきりて圖して、法輪寺に安置せらる



ると、元亨釋書にあり。一説に小栗栖野、法淋寺、常曉律師の太元堂云云。  
○高野は——金剛峯寺と號す。元亨釋書一曰、弘仁七年遊紀州相勝攸上二高野山二創金剛峯寺一云云。

○弘法大師——元亨釋書云、釋空海、世姓佐伯氏、讃州多度郡人、父田公、母阿刀氏、夢梵僧入懷有身云云。謁唐青龍寺惠果一授灌頂。承和二年三月廿一日、入定。延喜廿一年十月諡弘法大師。

○石山——聖武御宇、東大寺の佛にみがきぬべき金を得んため祈願に、朗辨上人瀬多に庵して、如意輪を安置して後、奥州より始て黄金を奉りければ、此寺をたてて、丈六の觀音をきざみて、はじめの像を中にこめ、又金剛藏王と執金剛神とを左右に安置せり。猶元亨釋書に委し。

○粉川——紀州那賀郡風市村、粉河寺は、寶龜元年に建つ。獵師大伴孔子古、此山に瑞光を見て、佛を安置せまくおもふに、ふしぎの童來て一七日のほどに、金色の千手觀音をあらはせり。其後河内の澁河郡の佐大夫といふ者、一子の病を此觀音に祈りて平癒せしかば、伊都郡澁田村の富家のやもめ、此事をききたふとみて、此寺をたつるよし、元亨釋書に委し。

○滋賀——崇福寺と號す。近江滋賀郡にあり。ながらの寺とも此滋賀寺を詠ずるよし、八重御抄にあり。天智天皇の御時、此地に瑞光ありて、かたはらに瀧

有り。ふしぎの優姿塞すみて、此地は古仙のかくれふす所の由、帝に申しければ、帝聞し召して、かねて靈地を得て寺をたてんの御心ざしある故、此寺を立て給ふ事、元亨釋書にあり。今は三井寺の末寺のよし拾芥にみゆ。

百七十二

經は法華經は更也。千手經。普賢十願。隨求經。尊勝陀羅尼。阿彌陀の大呪。千手陀羅尼。

○法華經はさら也——妙法蓮華經は、秦の羅什三藏の翻譯。其弟子僧睿の筆受。今の世におこなはるゝは是なり。諸經最第一とすれば、更なりといふなるべし。

○千手經——千手千眼觀自在菩薩廣大圓滿無礙大悲心陀羅尼經なるべし。世に千手陀羅尼經といふ是也。西天竺沙門伽梵達摩譯云云。

○ふげん十願——これ華嚴經の普賢行願品をいふなるべし。大方廣佛華嚴經入不思議解脫境界普賢行願品といへり。般若三藏譯云云。此品の中に普賢十種の大行願をたて給ふ。一者禮敬諸佛。二者稱讚如來。三者廣修供養。四者懺悔業障。五者隨喜功德。六者請轉法輪。七者請佛住世。八者隨佛學衆。九者恒順衆生。十者普皆廻向。このゆるこ十大願經といふなるべし。



○ずるぐ經——隨求陀羅尼經一卷あり。不空三藏の翻譯也。滅惡趣菩薩の、一切の衆生の苦を拔濟せん事を世尊に請うて、世尊此だらにをとき授け給へり。この眞言は、三世の諸佛の無數萬劫をへて、毘盧遮那如來の自法界智の中にし、無數劫を盡して求め給へり。此故に隨求郎得眞言と名付云云。

○尊勝だらに——佛頂尊勝陀羅尼經一卷。大唐闍賓佛陀婆利奉勅譯云云。佛在世に、善住太子、七日のうち死して、地獄におつべきしるしありしに、帝釋あはれみて、佛に此よし申し給へば、佛此だらにをときさづけ給ひて、其難をまぬかれたり。其靈驗無量云云。

○あみだの大す——阿彌陀の眞言也。眞言家には大咒とすみてよめり。阿彌陀根本陀羅尼ともいへり。無量壽軌に出づ云云。惠運錄に別にのせて十甘露眞言と名づく云云。源氏鈴虫巻に、あみだの大すいとたふとく云云。讀くせ口傳。

○せんずだらに——すなはち彼千手陀羅尼經の中にあり。其功德彼經に委し。

百七十三

文は 文集。文撰。博士の申文。

○文集——白樂天が文集也。七十卷あり。白氏長慶集は編やうかはりて七十一卷也。

○文選——梁の昭明太子の、周秦漢より、梁の世までの文をあつめて卅卷あり。唐の李善が註に、五臣の註をくはへて六十卷とす。

○はかせの申文——官を望みて、除目などに上る文也。其牀延喜式にあり。其品は江次第に委し。中にも博士のは小野篁の申文、三善道統の申文等世に傳はれり。

百七十四

佛は 如意りは、人の心をおぼし煩ひて、つら杖をつきておはする、世に知らずあはれにはづかし。千手。すべて六觀音。不動尊。藥師佛。釋迦。彌勒。普賢。地藏。文珠。

○如意りは人の心を——是此大士の相好を云ふ也。觀自在如意輪菩薩瑜伽法要曰、金剛智三藏譯、六臂身金色、住說法相。右第一思惟、第二持寶珠、第三持念珠、左第一按光明山、第二持蓮花、第三持輪云云。この右第一思惟の手は、愍念有情故といへり。此かたちを此双紙にはかくいへるにや。如意輪觀音、或は二臂にて、右は思惟、左は蓮花を持つもあり。これも右は同前、左持蓮花は能淨諸非法故云云。

○千手——千手陀羅尼經曰、即發誓言若我當來堪能利益完樂一切衆生者



令<sup>シテ</sup>我<sup>ヲ</sup>即時<sup>ニ</sup>身<sup>ニ</sup>生<sup>シテ</sup>二千手千眼、具<sup>セ</sup>足<sup>上</sup>發<sup>シテ</sup>是<sup>願</sup>已<sup>應</sup>時<sup>身</sup>上<sup>千手千眼</sup>悉<sup>具</sup>足<sup>云云</sup>。

○すべて六観音——拾芥云、六観音配六道。大悲観音、千手變破二地獄道三障。大慈観音、正観音變破二餓飢道三障。師子無畏観音、馬頭變破二畜生道三障。大光普照観音、十一面變破二修羅道三障。天人丈夫観音、准胎變破二人道三障。大梵深遠観音、如意輪、變破二天道三障。今案眞言宗、并法相宗除二准胎観音一奉<sup>レ</sup>加<sup>ヘ</sup>三不空絹索観音。

○不動尊——底哩三昧經上曰、不動者是菩提心、大寂定義也。猶儀軌委。大日經二曰、爲<sup>レ</sup>二一切障<sup>一</sup>故、住<sup>ニ</sup>火上三昧<sup>一</sup>。

○藥師佛——藥師瑠璃光如來。要文我<sup>ガ</sup>此<sup>シヤウガウ</sup>名<sup>ニ</sup>號<sup>ス</sup>一<sup>ニ</sup>經<sup>ニ</sup>其<sup>耳</sup>衆<sup>病</sup>悉<sup>除</sup>心<sup>身</sup>安<sup>樂</sup>これなり。猶本願功德經に十二願を説き給へり。文しげければ畧す。

○しゃか——釋迦牟尼、翻譯名義集一曰、撫華云、此云<sup>ニ</sup>能仁寂默<sup>一</sup>。寂默故不<sup>レ</sup>住<sup>ニ</sup>生死<sup>一</sup>能仁故不<sup>レ</sup>住<sup>ニ</sup>涅槃<sup>一</sup>。悲智兼運立<sup>ニ</sup>此嘉稱<sup>一</sup>猶委し。まことに一代教主に  
おはすめり。

○みろく——名義集云、彌勒、淨名疏云此<sup>ニ</sup>慈氏<sup>一</sup>。過去爲<sup>レ</sup>王名<sup>ニ</sup>曇摩流支<sup>一</sup>。慈<sup>ニ</sup>育國人<sup>一</sup>。自<sup>レ</sup>爾至<sup>レ</sup>今<sup>ニ</sup>常名<sup>ニ</sup>慈氏<sup>一</sup>。姓<sup>ハ</sup>阿逸多、此云<sup>ニ</sup>無能勝<sup>一</sup>云云。みろくは、釋迦の付屬をうけて一生補處の菩薩とす。第一滅劫のはじめに下生し給ふ。成佛して三會に説法すべき故に、當來導師と申す也。釋尊入滅よりみろくの出世

までは、五十七俱低六十百千歳をへだつといへり。彌勒下生經には、將來久遠劫於<sup>ニ</sup>此國界<sup>一</sup>成佛云云。河海。

○普賢——名義集云、圓黨畧疏云、一約<sup>ニ</sup>自體<sup>一</sup>體性周編曰<sup>レ</sup>普。隨<sup>テ</sup>緣<sup>成</sup>德曰<sup>レ</sup>賢。二約<sup>ニ</sup>諸位<sup>一</sup>。曲<sup>ニ</sup>濟<sup>一</sup>無<sup>レ</sup>遺曰<sup>レ</sup>普。鄰<sup>ニ</sup>極<sup>一</sup>亞<sup>レ</sup>聖曰<sup>レ</sup>賢。三約<sup>ニ</sup>當位<sup>一</sup>。德無<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>賢。周曰<sup>レ</sup>普。調柔善順曰<sup>レ</sup>賢云云。釋尊法華經を説きはり給ひてのち、普賢ぼさち東方の寶威徳國より佛前に來りて、戀法して、四法成就の法門を得て、末代惡世に法華經の行者を守護し惡魔夜叉等の難をまぬかれしめ、未來は成佛せしめんとて二十句陀羅尼をとけり。猶普賢菩薩觀發品に委し。

○地藏——大藏綱目指要録三曰、地藏十輪經十卷。唐玄奘三藏譯。地則堅厚無<sup>レ</sup>溼。藏則含無<sup>レ</sup>盡。以<sup>ニ</sup>二十佛輪<sup>一</sup>轉<sup>ニ</sup>二十惡業<sup>一</sup>故也。六道の衆生濟度のぼさち也。○文珠——名義集云、文珠師利、此云<sup>ニ</sup>妙徳<sup>一</sup>。大經云、了<sup>レ</sup>見<sup>ニ</sup>佛性<sup>一</sup>。猶如<sup>ニ</sup>妙徳<sup>一</sup>等。淨名疏云、若見<sup>ニ</sup>佛性<sup>一</sup>即具<sup>ニ</sup>三徳<sup>一</sup>。不縱<sup>ニ</sup>不横<sup>一</sup>故名<sup>ニ</sup>妙徳<sup>一</sup>云云。西域記云、曼殊室利。唐言<sup>ニ</sup>妙吉祥<sup>一</sup>。

百七十五

物語は住吉、空穗の類。殿移り。月待つ女。交野の少將。梅壺の少將。人め。國譲り。埋れ木。道心すすむる松が枝。こま野の物語は、ふるきかはほりさし出でて

一是此物がたりにある事なるべし



もいにしがをかしき也。

○住吉物語——二卷あり。異本十卷あり。源氏物語に用ゐられしは二卷の住吉物がたりと見ゆ。

○うつぼのるゐ——うつぼ物がたりのたぐひといへる事なるべし。うつぼは廿卷あり。

○殿うつり——是より以下の物語、今の世所見なし。八雲御抄學書の中にも、仕吉物がたりの外はしるさせ給はず。其代にもすでに絶々なりしなるべし。

○かたの少將——源氏帚木野分卷等に、其名出でたり。又おちくぼの物語にも、辨の少將を、世の人はかたの少將と申すめりとあり。又右近が父季繩の少將を交野の少將といふよし支旨法印の百人一首抄に有り。然れども物語は世に傳はらず。

百七十六

一印南野、八雲  
播磨  
二交野、八雲、  
河内  
三栗津、八雲、  
近江

野は 嵯峨野更也。印南野。交野。こま野。栗津野。飛火野。しめぢ野。そらけ野。こそすゝろにをかしけれ。などさつけたるにかあらん。安部野。宮城野。春日野。紫野。

○嵯峨野さら也——昔は秋萩の時など野遊し、撰虫など遊興の所なれば、更也

といへるなるべし。

○こま野——山城の駒のわたりにや。猶可尋之。

○飛火野——八雲、大和春日野也。袖中抄云、國史云、和銅五年正月廢高安烽、始置高見及大和國春日烽。以通平城也云云。

○しめぢ野——八雲云、しめぢ野、山城、是在清輔初學抄云云。おなじ所なるべし。

○あべの——攝州住吉と天王寺とのあはひに安陪野あり。是にや。

○むらさき野——八雲云、近江。萬葉あかねさす云云。愚案後拾遺に長能、紫の野にとよみしは山城今宮也。

百七十七

陀羅尼は 曉。

○陀羅尼——名義集云、秦言能持。集善法能持令不散不レ失。又肇翻三惣持謂持善不レ失持惡不レ生。此双紙の心はだらにはあかつきよみてよしと也。前にいへるずるぐだらに、尊勝だらに、千手だらにの類にや。一切經藏効戈の二箱に、陀羅尼集十卷あり。其外諸經のだらにあげていひがたし。

四八雲抄にも國  
しられず  
五いかでさやう  
に名づけしこ也  
六奥州也  
七大和也



讀經は 夕ぐれ。

○どきやうは——看經などなるべし。

百七十八

百七十九

遊びは 夜、人の顔見えぬ程。

○あそびは——音楽をいひ、又よろづのあそびわざをいふべし。

百八十

遊び事は 様あしけれども、鞆もをかし。小弓。韻塞。碁。

○まり——順和名云、蹴鞠以足逆踏也。打毬毛丸打者也云云。愚案蹴鞠はよのつねの鞠也。打毬は手まりの類也。又圓機活法に、擊毬あり。杖にてうちて上せしむるあそび也。

○こゆみ——源氏若菜の上卷に月のうちに、小弓もたせてまゐり給へとあり。

百八十一

一イ本、狛粹、こまの一越調云

舞は 駿河舞。求め子。太平樂は、様あしけれど、いとをかし。太刀などうたてくあれど、いと面白し。漢土に敵に具して遊びけんなど聞くに。鳥の舞。拔頭は、頭の髪ふりかけたる目見などは、恐しけれど、樂もいと面白し。落躑は、二人して膝踏みて舞ひたる。狛がた。

○するがまひ、もとめこ——東遊是也。花鳥餘情云、東遊譜云、先一二歌、次駿河舞。次求子。次加太於呂之、調子高麗双調也。

○たいへいらく——順和名の道曲調の所に云、太平樂出時曲、謂之胡少子武昌樂。合歡臨太平樂之急也云云。

○もろこしにかたきにぐして——漢高祖楚項羽と鴻門の會に、酒宴の半に、項羽の臣、亞夫高祖をうたんとて、項莊に劍をぬいてまはしめて、ひまあらばと高祖をうかがふに、項伯といふ者、高祖をいたはりて、劍をぬいて共にまひて、高祖をへだておほひて終にうたせざりし。この項莊が舞を太平の曲をまひしと太平記にもしるせり。是を敵にぐしてあそぶといふなるべし。史記九十一、樊噲が傳に委し。

○鳥のまひ——河海云、鳥樂、迦陵頻也。一越調也云云。順和名に沙陀調の曲、迦陵頻。妙音天淨南竺國に此舞を傳ふ。婆羅門僧正これを見て、受け傳へて唐地にとどめず。本朝に傳ふ云々。

○ぼとら——拾芥云、拔頭乞食調云云。但和名道調曲の中に云、拔頭、拔音如レ



末云々。  
○らくそん——落蹲、高麗一越調の樂也。納蘇利ともいへり。五月六日の競馬の日、雅樂寮これを奏するよし花鳥餘情にあり。

百八十二

引ものは琵琶、さうのこと。

○琵琶——和名云、振、琵琶撥名也。今案琵琶頸有二四柱、又琵琶體有二反首轉覆手承絃揆面落帶滿月等之名云々。胡國にて馬上にて引く物也。又魏武帝造れり云々。  
○さうのこと——和名云、箏形似瑟而短。有二十三絃云々。神農造又蒙恬所造秦聲也云々。

百八十三

調は 風香調。黃鐘調。蘇合の急。鶯の囀と言ふ調。想夫戀。  
○ふかうでう。わうじきでう——琵琶の風香調、黃鐘歟。河海云凡琵琶は風香調、反風香調祕曲あり。楊眞操流泉曲也。仍以二此兩調子爲先。琵琶の黃鐘調は笛の平調に合する也。掃部頭貞敏四調を定めたり。風香調は合二笛黃鐘調。反

一目にたらぬものなれば也  
二忍びてきたる男なごの忘れ置きたる也  
三イ、たて文の四笙の笛也  
五笙はよこぶんのやうならでかさ高ければ也

風香調は合二笛一越調双調。黃鐘調は合二笛平調。清調は合二笛平調盤涉調。  
○そかうのさう——蘇香急。和名云、盤涉調、蘇合香、大曲。俗只云蘇合一云々。其樂の急譜別にあり。二反めの時口傳ありとぞ。  
○うぐひすのさへづり——春鶯囀。和名に一越調云云。源氏花宴に、春の鶯さへづるといふまひいと面白くとあり。此樂の事なるべし。  
○さうふれん——想夫憐。相府蓮。和名平調。河海同。愚案太平廣記二百四十二謬誤部云、唐司空子頤以三樂曲有二想夫憐之名、嫌其不雅、將欲改之。客有レ笑曰、南朝相府曾有二瑞蓮。改レ歌爲二相府蓮。自レ是后人語誤及レ不改。國史補。

百八十四

笛は 横笛いみじうをかし。遠より聞ゆるが、やうく近うなりゆくもをかし。近かりつるが遙になりて、いと仄かに聞ゆるも、いとをかし。車にても徒歩にても馬にても、すべて懐にさし入れて持たるも、何とも見えず。さばかりをかきき物は無し。まして聞き知りたる調子など、いみじうめでたし。曉などに、忘れて枕のもとにありたるを見つけたるも、猶をかし。人の許より取りにおこせたるを、おし包みて遣るも、たゞ文のやうに見えたり。笙の笛は、月の明きに、車などにて聞えたる、いみじうをかし。所せく持て扱ひにくくぞ見ゆる。吹く顔や如何にぞ、それ



六何ミやらんよ  
 からぬミ也  
 七イ、なめり  
 ハイ、かしがま  
 九イ、のこ、ち  
 して  
 一〇加茂臨時の祭  
 也  
 二身の毛たちて  
 面白き心也  
 三御前のかたへ  
 樂人の出づる也

は横笛も吹きなしありかし。篳篥は、いとむつかしう、秋の虫を言はば、轡虫など  
 に似て、うたて、け近く聞かまほしからず。まして悪う吹きたるはいと憎きに、  
 時の祭の日、いまだ御前には出でてはてて、物の後にて、横笛をいみじう吹きたた  
 る。あな面白と聞く程に、半許りより、うち添へて吹きのぼせたる程こそ、只いみ  
 じう、うるはしき髪持たらん人も、皆立ちあがりぬべき心地ぞする。やうく、  
 あせて歩み出でたる。いみじうをかし。

○とほうよりきこゆるが——人の笛ふきてありくをきく時也。又人のふきぬる  
 所を、我がとほりてきくさま也。兩説皆可レ用。文選長笛賦云、乍近乍遠  
 とあるおもかげ有り。

○さうのふえ——笙、釋名云笙生也。象物貫地生、以匏爲之。其中空以受  
 簧也。説文曰、笙正月之音、物生故謂之笙。三簧象鳳之聲。

○ひちりき——説文云、篳篥、箛管也。卷蘆葉爲頭。截竹爲管。出胡地。  
 ○なからばかりより——横笛の調の半分ほどより、ひちりきを吹きたるや。猶  
 口傳。

○うるはしき髪もたらん人もみなたちあがり——物のそぞろに面白き時は、毛  
 髪立ちてぞつとする也。堀河後百首俊頼、「琴のねのことちにむせぶ夕ぐれは毛  
 もいよ立ちぬそぞろさむさに」

百八十五

見る物は、行幸。祭の歸さ。御賀茂詣。臨時の祭。空曇りて寒げなるに、雪少しう  
 ち散りて、挿頭の花、青摺などにかゝりたる。えも言はずをかし。太刀の鞘の、き  
 はやかに黒う斑にて、しらく廣う見えたるに、半臂の緒のやうしたるやうにかゝり  
 たる。地摺袴の中より氷かと驚くばかりなる打目など、すべていとめてたし。今少  
 し多く渡らせまほしきに、使は必ず憎げなるもあるたびは目もとまらぬ。されど、  
 藤の花に隠されたる程はをかしう、猶過ぎぬる方を見送らるゝに、陪従の品後れた  
 る。柳の下襲に、挾頭の山吹、おもなく見ゆれども、扇いと高くうちならして、賀  
 茂の社のゆふだすき」と歌ひたるは、いとをかし。

○行幸——朝觀行幸、野行幸、諸社の行幸の類也。拾芥儀式畧部云、行幸前陣  
 京職、神祇、内藏、彈正、兵部、民部、雅樂、治部、式部、官史、隼人、少納  
 玉卿、左右近衛、中央御輿、女官、侍中。後陣典藥、内膳、造酒下略。猶神社  
 行幸の儀等委。

○まつりのかへさ——加茂祭の翌日きのふの使の中少將、舞人等の歸さ也。禁  
 中にも還立の儀あり。江次第六云、還立儀裝束如昨云云。

一賀茂の也、前  
 註  
 二是よりりんじ  
 のまつりの事を  
 云ふ也  
 三無人、歌人な  
 びのさまなり  
 四無人竹の文、  
 青摺の袍を着す  
 五花鳥にあり  
 五劔鞘  
 六陪従の半臂の  
 赤紐のやうすし  
 たるやうに也  
 七無人、地摺の  
 袴を着す花鳥  
 にあり  
 八氷。打目のつ  
 やめきし也  
 九陪従無人など  
 猶おほくまほら  
 せて見たき心也  
 一〇藤のかざしに



顔の見にくさの  
かくれたる事也  
二陪従はしゆる  
の文の青摺の袍  
柳色下かさねを  
着する也、前註  
三品おくれたる  
物のかざしな  
は也

○御かもまうで——關白賀茂詣。卯月申日。公事根源云、此事は必ず賀茂祭の前日ある事也。主人は乗車にて、地下殿上の前駟有り。白妙の御幣、神寶の唐櫃やうの物をかたげもたしむ。琴持菅笠深沓といふ物を召し供す。上達部車をつらぬ。社頭にて神拜あり。上下略。  
○かざしの花——臨時の祭に、藁を結びて臺として、挿頭の花を指して、長橋馬道の西のつまに立て、重土器を舞人哥人に給ひて、後かざしの花を給ふ。江次第二委。  
○かものやしろのゆふ禊——愚案此哥かもの社の姫小松といふべきをゆふだすきと書きたがへしにや。古今集に冬の賀茂祭のうた、藤原のとしゆきの朝臣、「千早ふる賀茂の社の姫小松萬代ふとも色はかはらじ」此歌なるべし。但又同集に、「千早振るかもの社のゆふ禊ひとひも君をかけぬ日はなし」といふ歌をうたへるにや。

一是より前にい  
ひし事を委しく  
いふ也  
二めさせ申す心  
也  
三イ、たてまつ  
るには  
四神々也

行幸に準ふる物は、何かあらん。御輿に奉りたるを見参らせたるは、明け暮れ御前に侍ひ仕らまつる事も覺えず、神々しう厳くしう、常は何とも無きつかさ、姫まうち君さへぞ、やむことなう珍しう覺ゆる。御綱の助、中少將など、いとをかし。  
○御こしにたてまつり——天子の御輿は葱華とて、葱をかざると也。  
○みつなのすけ——鳳輦の御綱を奉行する大舍人助をいふにや。百寮訓要云、

五官人ごも也  
六東整子也、前註

大舍人寮宿直の事を司る。令に見えたり。節會の諸卿をめす事は、大舍人の役也。行幸の時、御綱などを奉行す云云。

一是亦一段也  
二行粧の奇麗なりし也  
三イいさいそぎ  
四イかご  
五盤敷  
六しをれし也  
七イいみじうい  
り  
八京にはまれなるにこの心也  
九イす  
一〇郭公に似せん  
也  
二まつりのかへ  
さをまつ也  
三無期  
三齋院のめさるるものなるべし  
四かやうの駕輿  
了、輿長なごの  
齋王の御あたり  
に、いかでまる  
るぞとおそれが

祭の歸さ、いみじうをかし。昨日は萬の事麗しうて、一條の大路の廣う清らなるに、日の影も暑く、車にさし入りたるも眩ゆければ、扇にて隠し、居なほりなどして、久しう待ちつるも、見苦しう汗などもあえしを、今日はいと疾く出て、雲林院、知足院などのもとに立てる車ども、葵かつらもうちなへて見ゆ。日は出てたれど、空は猶うち曇りたるに、争て聞かんと、目をさまし起き居て待たる、郭公の、數多さへあるにやと聞ゆるまで鳴き響かせば、いみじうめでたしと思ふ程に、鶯の老いたる聲にて、かれ似せんとおぼしく、うち添へたるこそ、憎けれど、またをかし。二つしかと待つに、御社の方より、赤き衣など着たる者どもなど連れ立ちてくるを、「如何にぞ。事成りぬや」など言へば、「まだ無期」など應へて、御輿、腰輿なども歸る。これに奉りて、おはしますらんもめでたく、け近く、争てさる下衆などの侍ふにかと畏し。遙かげに言ふ程もなく歸らせ給ふ。あふひより始めて、青朽葉ともの、いとをかし見ゆるに、所の衆の、青色白襲を、けしきばかり引きかけたるは、卯花垣根近う覺えて、郭公も蔭に隠れぬべう覺ゆかし。昨日は車ひとつに數多乗りて、二藍の直衣、あるは狩衣など亂れ着て、簾取りおろし、物狂ほしきまで見えし君達の、齋院の垣下にて、日の装束麗しくて、今日は一人づつ、をさくしく



ましと也  
 一五前にまたむご  
 さいひし事也  
 一六齋王の還御な  
 るべし  
 一七出車なごの女  
 房の出でたち也  
 一八麴塵の袍也  
 一九白重、夏の服  
 也  
 二〇白重の色、卯  
 花に似たる心也  
 二一祭の日也  
 二二藍直衣也  
 二三東帯也  
 二四一車に一人づ  
 つ也  
 二五おさなしき心  
 也  
 二六後  
 二七毛わらはにて昇  
 殿の人也  
 二八物見の人歸路  
 をいそぐさま也  
 二九元車よりかやう  
 にないそぎそご  
 いふ也  
 三〇車副なごのい

乗りたる後に、殿上童乗せたるもをかし。渡り果てぬる後には、などかさしも惑ふらむ。我もくくと、危く恐ろしきまで、前に立たむと急ぐを、かからな急ぎそ。のどやかに遣れ」と、扇をさし出でて制すれど、聞きも入れねば、わりなくて、少し廣き所に、強ひて止めさせて立ちたるを、心許なく憎しとぞ思ひたる。競ひかゝる車どもを、見やりてあるこそをかしけれ。少しよろしき程にやり過して、道の山里めき哀れなるに、うつ木垣根と言ふ物の、いと荒荒しうおどろかしげに、さし出でたる枝どもなど多かるに、花はまだよくも開け果てず、蕾勝に見ゆるを折らせて、車の此方彼方などにさしたるも、桂などの萎みたるが口惜しきに、をかしう覺ゆ。遠き程は、えも通るまじう見ゆる行く先きを、近う行きもてゆけば、さしもあらざりつるこそをかしけれ。男の車の誰とも知らぬが、後に引き續きて來るも、たゞなるよりはをかしと見る程に、引きわかるゝ所にて、「峰にわかるゝ」と言ひたるもをか

し。  
 ○雲林院ちそくゐん——紫野の邊にや。前註。  
 ○ことなりぬやと——事成る時至れりやと問ふ也。  
 ○またむご——無期、いつともなしとの心也。赤ききぬ着たる物どものこたへ也。  
 ○御こしたごし——江次第六、賀茂祭、路頭次第云、長官御輿駕輿丁前後廿人。

そぐ也  
 三せんかたなく  
 て也  
 三三車をや  
 三三くるまそひな  
 ごの心也  
 三四跡より來る車  
 じも也  
 三五我車を也  
 三六今さしたる卯  
 花なれば也  
 三七後也  
 三八車わかるゝ所  
 にて男の詠吟す  
 る也

輿長左右各五人。女嬬十人。執物十人。腰輿上下略。  
 ○これに奉りておはしますらん——齋院是にのりておはすらんと也。齋院道のほどは御車にて、御社近くては腰輿に召さるゝ也。江次第六、路頭次第云、齋王先詣三下社。暫留三社頭小社、脱三却衣裳三更三清服。即駕三腰輿三入三社用三輿長一行列在式。未到三社十許丈齋王下三腰輿三步行以三兩面三布三道。就三社前左殿座。事畢。出三社外三駕三牛車三參三上社三下略。  
 ○あふひよりはじめて青朽葉どもの——人々のかざせるあふひ草、青朽葉のきぬなど也。桃華藥葉云、青朽葉、表青丹の黒みあり、裏青云云。イ本遙にいひつれど程もなく歸らせ給ふに、御使ひのかざしの葵もすこしなよやか也。桂の葉もうちしほみて、中々いとえんに見えたり。御車の過させ給ふ句ひより始め、出し車どもの扇、からきぬ、青朽葉なるなどもなまめかしう見ゆる。雑色所の衆のあを色云々。  
 ○郭公も蔭にかくれ——「なく聲をえやは忍ばぬ郭公初卯の花の蔭にかくれて」人丸前註。  
 ○齋院のえんがにて——齋院の饗の垣下にまゐらるゝなるべし。祭の日二獻の時、舞人に垣下の公卿勸盃の事、紅次第にあり。けふもさやうの儀式あるにや。弄花抄云、大饗などにも、人數の外の人の交りたるを、垣下の君達といふ



一是より例の筆のすさび也  
 ニイ、たゞさまになが／＼とゆ  
 けは  
 三清潔なる也  
 四生垣なるべし  
 五イ、たりけるにおきあがりてふさかゞへ

也云云。

○かつらなどのしほみ——きのふのあふひにそへし桂のしほみしに、今さしたる卯花のあたらしきが見事なる也。

○とほきほどはえもとほるまじう見えたる行ききを——さきに車せきつゞきて遠く見ればとほりがたく見えしも、近くゆきもてゆけばさもあらぬと也。

○みねにわかるゝ——古今戀「風ふけば峰に別るゝ白雲の絶えてつれなき君が心か」

百八十六

五月ばかり山里に歩く。いみじくをかし。澤水もげに只いと青く見えわたるに、うへはつれなく草生ひ茂りたるを、長々とたゞ様に行けば、下はえならざりける水の、深うはあらぬと、人の歩むにつけて、迸あげたるいとをかし。左右にある垣の、枝などのかゝりて、車の屋かたに入るも、急ぎて捕へて折らんと思ふに、ふと外れて過ぎぬるも口惜し。蓬の車に押しひしがれたるが、輪の舞ひ立ちたるに、近うかがへたる香も、いとをかし。

○うへはつれなく草おひ——うへは何ともなく水草生ひたる也。後撰戀五、「蓮葉のうへはつれなきうらにこそ物あらがひはつくといふなれ」此詞ばかりとれ

り。

○ちからかゞへたる香——蓬の匂ひの間近くしたる心也。前にも汗のかすこしかがへと有り。

百八十七

一是亦一段也  
 二君達なごのさま也  
 三車の内にてひく也  
 四是は我のりてゆくさま也  
 五炬火なり  
 六香也

いみじう暑き比、夕涼みといふ程の、物の様などおぼめかしきに、男車のさき追ふは、言ふべき事にもあらず。たゞの人も、後の簾あげて、二人も一人も乗りて、走らせて行くこそ、いと涼しげなれ。まして琵琶弾きならし、笛の音聞ゆるは、過ぎて往ぬるも口惜しく、さやうなる程に、牛の鞞の香の、怪しうかぎ知らぬさまなれど、うちかゞれたるをかきこそ、物狂ほしけれ。いと暗う闇なるに、先にともしたる松の煙の香の、車にかかれるもいとをかし。

○あやしうかぎしらぬさまなれど——鞞の香なれば也。

○物くるほしけれ——狂の字也。あやしき物の香に愛着すれば也。

百八十八

一是亦一段也  
 ニイ、ミリ

五日の菖蒲の、秋冬過ぐるまであるが、いみじう白み枯れてあやしきを、引き折りあげたるに、其折の香残りてかゞへたるも、いみじうをかし。



一是亦一段也  
二イ、すき  
三香の残りたる也

○其折のかのこりて——端午の頃の香也。イ、其折の香のおなじやうにかゞれたるもいみじうをかし云云。

百八十九

よくたきしめたる薫物の、昨日、一昨日、今日などはうち忘れたるに、衣を引き被きたる中に、煙の残りたるは、今のよりもめでたし。

○いまのよりもめでたし——今焼きたる香よりも也。或本に此あとに「六月廿日ばかりにいみじう暑きに、蟬の聲のみ絶えず鳴き出して、風の氣色もなきに、いと木高き木どものおほかるが、木くらく青き中より、黄なる葉のやうくひるがへりおちたるこそ、すゞろに哀なれ。秋の露おもひやられて、おなじ心にいみじう暑きひるなかに、いかなるわざをせんと、扇の風もぬるく佗しければ、氷水に手をひたしなどあつかひて、只今何ばかりなる事あらんに、此暑さを忘れて心うつす事ありなんやといふほどに、あたり匂ふばかりなる薄やうを、なでしこのいみじう色こきに、むすびつけたる文をとりいれたるこそ、出づらんほどのあせおもひやるも、心ざしあさくはあらじと思ふに、かくつかふ風だにあかずぬるくおぼえつる扇もうちおきて、まづひきあけつべけれ云云。

百九十

月のいとあかきに川を渡れば、牛の歩むまゝに、水晶などの割れたるやうに、水の散りたるこそをかしけれ。

○水のちりたるこそをかしけれ——イ、此次に「下やだれを高やかにおしはさみたれば、車のながえはいとつやゝかに見えて、月の影のうつりたるなどいとをかし。行き付くまでかくてあれかしとおぼゆ」とあり。

百九十一

おほきにてよき物 法師。くだ物。家。餌囊。硯の墨。男の兒の目、餘り細きは女めきたり。又、鏡のやうならんは恐ろし。火桶。酸漿。松の木。山吹の花。馬も牛も、よきは大きにこそあめれ。

- くだ物——和名、菓、クダモノ。菓子也。
- ゑぶくろ——鷹の餌囊也。
- かなまり——金椀也。前註。
- 花びら——和名云、葩。草木花片也。

一イ、山ふき、櫻の花びら



一 簪也  
 二世俗のおはした也  
 三 装束也、鷹のえぶくろのかざりを風流にせし也  
 四 御厨子黒棚也  
 五 圓座也

短くてありぬべき物 頓の物縫ふ絲。燈臺。下衆女の髪、麗しく短くてありぬべし。人の娘の聲。

○とみの物ぬふ——急ぐ物を縫ふ絲也。

○とうだい——燈臺。

○人のむすめのこゑ——舌つきにてあいだれたるをきらへるべし。

百九十三

人の家につきしき物 厨。侍の曹司。簪の新しき。懸盤。童女。はした物。衝立障子。三尺の几帳。装束よくしたる餌囊。傘。書板。棚厨子。提子。銚子。中の盤。圓座。臂折りたる廊。ちくわう繪かきたる火桶。  
 ○くりや——厨。和名。字彙云、厨、烹任之所、ものを烹調するところ。臺所なるべし。  
 ○侍のざうし——曹司ハ局と同。今の世の部屋。  
 ○かけばん——懸盤。貴人の膳に用ゐる。源氏若菜院の御まへに淺香のかけばんとあり。

○童女、はした物——イ本、おほきやかなる童女、よきはした者とあり。

○中のばん——中盤。懸盤の次なるを云ふ也。河海云、延長御記曰、采女調二和若菜羹、供進。給二侍臣一盛二中院一置二中盤一略。

○ひぢをりたるらう——臂折廊也。廊のをれまがりゆく也。

○ちくわうゑかきたる——竹鶯畫也。桐火桶などに竹に鶯などゑにかきし也。

百九十四

物へ行く道に、清げなる男の、立文の細やかなる持ちて。急ぎ行くこそ、いつちならんと覺ゆれ。又、清げなる童女などの、袖いと鮮やかにあらず、萎えぼみたる、履子の艶やかなるが、革に土多く附いたるを履きて、白き紙に包みたる物、若しは箱の蓋に、草紙なども入れて持て行くこそ、いみじう呼び寄せて見まほしけれ。門近なる所をわたるを呼び入るゝに、愛敬なく應へもせて行く者は、使ふらんこそ推し量らるれ。

○けいし——前にも出でたり。革付のはき物なるべし。

○つかふらん人こそ——其従者のすげなきをつかふ主人も、さぞなどおもはるゝと也。

一 童女也  
 二 袖也  
 三 着なれたる也  
 四 土也  
 五 さほりゆく也  
 六 愛敬也  
 七 返事もせで也



一寂々さびしき  
心也

一車の装束也  
二句  
三あまりやつし  
たるはさ也  
四見ぐるしき車  
のさま也  
五よその車のま  
さりし也  
六さやうに見苦  
してはみるぞこ  
也  
七他の車をおし  
わけて、清少の  
近所にたつる也  
八よき車にのり  
たるゆゑ也  
九車の簾を居張  
る也、まつりを

百九十五

行幸はめでたき物、上達部、君達、車などの無きぞ、少しさうくしき。

○上達部君だちなどの——行幸には公卿以下歩行にて供奉なんば也。

百九十六

萬の事よりも、佗びしげなる車に、装束悪くて物見る人、いともどかし。説教など  
はいとよし。罪失ふ方の事なれば、それだに猶強ちなる様にて見苦しかるべきを、  
況して祭りなどは、見てありぬべし。下簾も無くて、白き單のうちたれなどしてあ  
めりかし。只其日の料にとて、車も下簾も仕立てて、いと口惜しうはあらじと出でた  
るだに。優る車など見つけては、何しになど覺ゆる物を、況して如何許りなる心地  
にて、さて見るらん。おりのぼり歩く君達の車の、おし分けて、近う立つ時などこ  
そ心ときめきはすれ、好き所に立てんと急がせば、疾く出で待つ程、いと久しきに、  
居張り立ち上りなど、暑く苦しく、待ち困ずる程に、齋院の垣下に参りたる殿上  
人、所の衆、辨、少納言など、七つ八つ引き續けて、院の方より走らせて來ること、  
事なりにけりと驚かれて嬉しけれ。殿上人の物言ひおこせ、所々の御前どもに、水  
飯食はすとて、棧敷のもとに、馬引き寄するに、覺えある人の子供などは、雑色な

まつてい也  
二困也、くるし  
む也  
三垣下、前二註  
三車也  
四齋院のかたよ  
り也  
五水飯也  
六御前の中に良  
家の子などある  
也  
七馬の口さるさ  
ま也  
八齋院の御輿也  
九イながえども  
五我車のまへに  
今きたる車のた  
つ也  
二下人を制し兼  
ねて主人にここ  
わる也  
三歴々の物見ぐ  
るま也  
四物見すべき所  
のある也  
五歴々に見ゆる  
車也  
六ゆすなご

どおりて、馬の口などしてをかし。さらぬ者の、見も入れられぬなどぞ、いとほし  
げなる。御輿の渡らせ給へば、簾もある限り取りおろし、過させ給ひぬるに、惑ひ  
あぐるもをかし。其前に立てる車は、いみじう制するに、「などと立つまじきぞ」  
と、強ひて立つれば、言ひ煩ひて、消息などすることをかしけれ。所も無く立ち重  
なりたるに、よき所の御車、人給引きつゞきて多く來るを、いづくに立たんと見る程  
に、只前ども只下りに下りて、立てる車どもを、只のみにのけさせて、人給續きて立  
てるこそ、いとめてたけれ。逐ひのけられたるえせ車ども、牛かけて、所ある方に  
ゆるがしめて行くなど、いと佗しげ也。きら／＼しきなどをば、えさしも推しひし  
がずかし。いと清げなれど、又ひなびあやしく、下衆も絶えず呼び寄せ、ちこ出し  
すゑなどするもあるぞかし。

○よろづの事よりも——是より行幸に上達部の車のなきがさうくしきといひ  
しに付けて、車の見ぐるしげなるがわるき事どもをいふ也。

○説經などはいとよし——説經聽聞の車などは、罪らしなふ後世のためなれば  
さまで風流に華麗ならでもよしと也。

○見でありぬべし——て文字にござりてよむ也。祭見る車見ぐるしくば、見ずし  
てあれかしと也。

○たゞ其日のれうにとて——祭見んためにとてと也。是より祭の物見車は花や



三、しめやかならぬさま也

かに有りたき心をいふ也。

○何しになど——かく人におとるさまにては、何しに物見に出でたるぞと覺ゆると也。

○よき所にたてんといそがせば——物見のたよりによき所を、人よりさきにとおもひて、車をいそがせ催したる心也。

○御前どもにするはん——前駈の人々に、水飯とて湯づけなどやらの物をくはする也。

○すだれもあるかぎりとりおろし——齋院へおそるゝさま也。イ本ながえどもとは、車の轆をおろし、牛をはなちたるさま也。是も禮儀なるべし。

○人給ひひきつゞきて——副車、延喜式。和名云、漢書註云、副車、ヒトケルマ後乗也。河海云、人給、ヒトケルマ俊國卿記權記有、此名三出車云云。花鳥云、出車は公方より點ぜられて、其人に給ふゆゑに、人給と名付くる也。

○たゞのけにのけさせて——源氏葵卷の車あらそひの所にも、ざふくの人なき障を思ひさだめて、みなさしのけさするといへるさまに似たり。

○うしかけて——いままではながえをおろして、しぢにたてておきしなるべし。

百九十七

一、こまらすべき人也

二人々の沙汰する也

三、后宮の御事を申す也

四、清少心也

五人のかたちはみえず、手ばかり也

六、后宮

七、后宮をほめ申す也

八、便なき人かよはせしを、はぢて空事といへる

九、御返事也

一〇、清少

二、なき名たつ事をいへり、雨にぬるる縁也

「細殿ほそどのに便なき人なん、曉アカキに笠さゝせて出でける」と言ひ出でたるを、よく聞けば我が上うへなりけり。地下など言ひても目安めやすく、人に許ゆるされぬばかりの人にもあらざめるを、怪あやしの事やと思ふほどに、上うへより御文持みづかて来て、「返事かへ只今」と仰おほせられたり。何事なににかと思ひて見れば、大笠おほのかたを書かきて、人は見えず、只手ただの限り笠かさを捕とらへさせて、下しもに、

「三笠山みかさの端はあけしあしたより」

と書かかせ給へり。猶なほはかなき事ことにても、めでたくのみ覺おぼえさせ給ふに、恥はづかしく心づき無なき事は、いかで御覽みせられじと思ふに、さる虚言うそなどの出でくるこそ、苦しけれどをかしようて、異紙ことに、雨あめをいみじう降ふらせて、下しもに、

「雨あめならぬ名のふりにけるかな。」

さてや、濡ぬれ衣いには侍さむらひらん」

と、啓けしたれば、右近内侍ウツノナシなどに語かたらせ給ひて、笑わらはせ給ひけり。

○ほそどのに——清少の廊の局むらに忍しのびてとまりし人、雨あめふる曉あけ歸かへりし事を沙汰せしなるべし。

○地下などいひても——彼とまりし人の事をいふ也。地下とは昇殿のぼりせざる人はいふ也。地下の人ながら、めやすき人と世にもゆるされしを、便べんなくとめまじき人といふがあやしきと也。

○大がさのかたをかきて——彼御文のさま也。繪にかゝせ給ふ也。



一勅物云、二年五月  
 二后宮の御腹に備子内親王敦康親王なごおはす也、前二註  
 三青麥にて調したる菓子也  
 四清少より后宮へ奉る也  
 五までこしさい

○みかき山——后宮の御連歌なるべし。彼笠さゝせて出でたる朝より、さま／＼人のいふ事あるを仰せらるゝなるべし。  
 ○はづかしく心づきなき——萬事めでたき后宮に、心付きなきふるまひは見えず。申すまじとのみ遠慮しつるに、かゝるうはさ出で来てしられまゐらせし苦しきよと也。  
 ○雨ならぬ名の——清少の付句也。心はかゝるうき名の世にふりて、后宮にまでしられまゐらせしはづかしさよとの心なるべし。  
 ○右近の内侍——前註。

百九十八

三條の宮におはします比、五日の菖蒲の輿など持ちて参り、薬玉まゐらせなど若き人々、御匣殿など薬玉して、姫宮、若宮つけさせ奉り、いとをかしき薬玉外よりも参らせたるに、青刺といふ物を、人の持て来るを、青き薄様を、艶なる硯の蓋に敷きて、「これまぜこしに候へば」とて参らせければ、  
 皆人は花や蝶やと急ぐ日も我が心をば君ぞ知りける  
 と、紙の端を引きやりて書かせ給へるも、いとめでたし。  
 ○三條の宮に——勅物云、長保元年八月九日自職御曹司一移御生昌三條宅

ふに同じ、まるりこし物なれば也  
 六后宮御歌  
 七青刺つゝみしうすやうのはし也

一こき紅のきぬ也  
 ニイ、かへ  
 三后宮の女房也  
 四不審、他本をかんがふべし

○さうぶのこし——菖蒲輿。禁中へ奉るを、后宮へもまゐらせしなるべし。公事根源端午の所に云、六府あやめのこしを南殿の東西に立つ。又時の花を折りそへて同じくおく。四日は朝餉の庭に、これを立つ云云。雲圖抄に圖あり。  
 ○みくしげどの——薬玉は絲所より奉れど、姫宮などには女中何も手づからしてまゐらせらるゝなるべし。拾芥云、御櫛笥殿在貞観殿中一以二上臈女房二爲二別當一云云。  
 ○皆人は花や——みな人は薬玉さして、花蝶と色々細工を急ぐ端午の日も、清少は我心を知りて、青刺を進らせて、満足と御戯也。

百九十九

十月十餘日の月いとあかきに、歩いて物見んとて、女房十五六人ばかり、皆濃き衣を上に着て、引き隠しつゝ有りし中に、中納言の君の、紅の張りたるを着て、頸より髪をかいこし給へりしかば、あたらしきぞとはいとよくもにたりし哉。鞆負の佐とぞ、若き人々はつけたりし。後に立ちて笑ふも知らずかし。  
 ○十月十餘日——これより別段なるべし。  
 ○くびよりかみをかいこし——源氏浮舟巻に、かみわきよりかいかしてとあり。也足軒御説、髪を脇の下より手に取たる躰也云云。是も首の程より前へ取りた



一是より五くた  
りイ本になし  
二イも  
三成信はひそか  
にいふ事をもき  
き知り給ひしこ  
也  
四奇特なれと含  
めたり

るさまにや。  
○ゆけひのすけ——左右衛門佐也。赤衣をきる物なれば、中納言をたとへしに  
や。

二百

成信の中將こそ、人の聲は、いみじうよう聞きしり給ひしか。同じ所の人の聲など  
は、常に聞かぬ人は、更にえ聞き分かず、殊に男は、人の聲をも手をも、見わき聞  
き分かぬ物を、いみじうみそかなるも、かしこう聞き分き給ひしこそ。

○成信の中將——勘物云、源成信兵部卿致平親王男。母左大臣雅信女。長徳四  
年左中將、元民部大輔。

二百一

大藏卿ばかり耳とき人無し。誠に蚊の睫の落つる程も、聞き付け給ひつべくこそ有  
りしか。職の御曹司の西おもてに住みし比、大殿の四位少將と物言ふに、側にある  
人、此少將に、「扇の繪の事言へ」とさゝめければ、「今彼君立ち給ひなんにを」と、み  
そかに言ひ入るゝを、其人だにえ聞きつけて、「何とかく」と耳を傾くるに、手  
をうちて、「憎し。さの給はば、今日はたゞじ」との給ふこそ、争て聞給ひつらんと

五此正光のみ、  
とさをいぶかり  
て也  
六イ、なに、  
七イ、遠くゐて  
八正光の詞也、  
我立ちてのみい  
はんとの給ふが  
にくきはごにこ  
也、たはぶれ也

あさましかりしか。

○大藏卿——勘物云、正光、長保二年藏人頭左中將。四年十月大藏卿。愚案參  
議正光。關白兼通公六男。母左馬頭有年女。

○蚊の睫のおつるほども——もろこしに殷師といふ物、患二耳、聰二聞二牀下蟻動一  
謂二之牛、鬪一と蒙求にあり。列子湯問篇に、焦螟といふ虫、群飛びて、集二於蚊  
睫一を、世にめよくみみとき人も、其形聲をえ見聞かぬを、只黄帝と容成子と神  
を以て見れば泰山の阿のごとく、氣を以てきけば雷霆の聲のごとしと云云。  
○其人だにえきゝつけで——彼そばにある人の扇の事いひしが事也。

二百二

硯きたなげに塵ばみ、墨の片つ方に、しどけなく磨り平めかし、らうおほきに成り  
たるが、ささしなどしたるこそ、心許なしと覺ゆれ。萬の調度はさる物にて、女は  
鏡、硯こそ、心の程見ゆるなめれ。おき口のはざめに塵るなど、打捨てたる様こよ  
なしかし。男はまして、文机清げに押しのごひて、重ねならずば、二つ懸子の硯の、  
いとつきくしう、蒔繪の様も、態とならねどをかしうて、墨、筆の様なども、人  
の目とむ許り仕立てたるこそをかしけれ。とあれどかゝれど同じ事とて、黒箱の蓋  
も、片し落ちたる硯、僅かに墨のゐたる、塵の此世には拂ひ難げなるに、水うち流



心也、すりかけの墨也  
 九面白き詞なるべし  
 二龜の首許見えたる也  
 二ひき目わろき心也  
 三是より又別の事也  
 三人の我筆つかふをも也  
 一四よからぬありさま也  
 一五すみもよくすぬ心也  
 一六假名に也  
 一七筆をなげ捨てたる也  
 一八筆の頭也  
 一九あら闇や也  
 二〇奥へより給へさ也  
 二一前をうけていふ也  
 二三句

して、青磁の龜の口落ちて、首の限り穴の程見えて、人わろきなども、つれなく人の前にさし出づかし。人の硯を引き寄せて、手習ひをも文をも書くに、「其筆な使ひ給ひそ」と言はれたらんこそ、いと佗しかるべけれ。うち置かんも人わろし。猶使ふもあやにく也。さ覺ゆる事も知りたれば、人のするも言はで見るに、手などよくもあらぬ人の、さすがに物書かまほしうするが、いとよく使ひかためたる筆を、あやしのやうに、水がちにさし濡して、「こはものややり」と、假名に細櫃の蓋などに書き散らして、横様に投げ置きたれば、水に頭はさし入れて伏せるも、憎き事ぞかし。されどさ言はんやは。人の前に居たるに、「あな闇。おうより給へ」と言ひたるこそ、又佗しけれ。さし覗きたるを見付けては、驚き言はれたるも、思ふ人の事にはあらずかし。

○塵ばみ——塵のたまれる也。源氏須磨卷にだいはんなどかたへはちりばみてとあり。  
 ○女はかゞみ硯こそ心のほど見ゆる——鏡は女のかたち作る物也。是おろそかなるは不暗なる心と見え、よきは心にくかるべし。硯は手かく人よくたしなむべければ、おろそかなれば手をすかぬ心見ゆべしと也。  
 ○こよなし——無越也。こゆる事もなく、魚箱に捨て置きたるさま也。  
 ○とあれどかゝれど——よくもてなしても、あしくても、物かけばおなじ事と

の心也。是より物にかまはぬ硯さまをいふ也。  
 ○くろばこのふたもかたしおち——蒔繪せぬ黒染の硯箱の蓋のふちのかたゝかけたるなり。  
 ○あをじのかめ——青磁龜也。焼物の水入の龜の形なる也。  
 ○猶つかふもあやにく也——文悪。進退しにくき心也。人にいはれて筆を置くも人めわるし。猶つかふも如何と迷惑したる心也。  
 ○さおぼゆるもしりたれば——さやうに迷惑なるも、思ひしりたればとなり。  
 ○こはものややりと——あとなし事をめたと書付けたるさまにや。  
 ○ほそびつのふた——ぬり桶也。前註。  
 ○されどさいはんやは——さやうに悪くつかひなすとして、其筆なつかひ給ひそともいふべき事ならねばせんかたなしと也。  
 ○さしのぞきたるを見つけ——我のぞくを、人見付けて驚きてとがめらるゝも、佗しきとふくめたる詞也。いはれたるもと句を切るべし。  
 ○おもふ人の事——是はよのつねの人のとがめたるが佗しきをいふ也。思ふ人をのぞきとがめられし事にはあらずと也。



一今さらにいふべきならぬ也  
 二消息也  
 三遠所の朋友親類などにも也  
 四文のめでたきをほめる詞也  
 五心もさなき心也  
 六目くれ胸ふたがる心也  
 七いま其文やらぬとも先づ心はなぐさむ也

珍しと言ふべき事にはあらねど、文こそ猶めてたき物なれ。遙かなる世界にある人のいみじくおぼつかなく、如何ならんと思ふに文を見れば、只今さし向ひたるやうに覺ゆる、いみじき事なりかし、我思ふ事を書き遣りつれば、あしこまでも行き着かざるらめど、心行く心地こそすれ。文といふ事無からましかば、如何にいふせく、くれふたがる心地せまし。萬の事思ひく、其人の許へとて、細々と書きて置きつれば、覺束なさを慰む心地するに、況して返事見つれば、命を延ぶべかめる、げにことわりや。

○あしこまでもゆきつかざるらめど——あしこはかしこ也。其文いまだ彼地まで行付くまじけれど、我心はまづおちつく心也。  
 ○げにことわりや——文をめでたき物といふは、まことにことわりならずやと也。イ本此次に川はあすか川ふちせさだめなくなどあり。前に出でたれば今其本を用ゐず。

春曙抄九終

岩波文庫 744-745

昭和六年八月廿五日發行

枕草子 中巻 ★★

定價四十錢

校訂者

池田龜鑑

發行者

東京市神田區一ツ橋通町三番地 岩波茂雄

印刷者

東京市本所區廣橋一丁目二十七番地 守岡功

凸版印刷株式會社印刷

發行所

東京市神田區一ツ橋通町三番地

岩波書店

電話 二二八一・二一〇八番  
九段(一〇二三)小賣部専用  
振替口座東京二六二四〇番



讀書子に寄す

岩波文庫發刊に際して

岩波茂雄

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。嘗ては民を愚昧ならしめるために學藝が最も狭き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに勵まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に限なく立たしめ民衆に伍せしめるであらう。近時大量生産豫約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも後代に貽すと誇稱する全集が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の翻譯企圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を繫縛して數十冊を強ふるが如き、果して其揚言する學藝解放の所以なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を推舉するに躊躇するものである。この秋にあつて岩波書店は自己の責務の愈重大なるを思ひ、從來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を慎重審議この際斷然實行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に互つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價値ある書を極めて簡易なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書物を各個に自由に選擇することが出来る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも内容に至つては嚴選最も力を盡し從來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犠牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此舉に参加し、希望と忠言とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒として其達成のため世の讀書子とのうるはしき共同を期待する。

昭和二年七月

既刊書目

國文學

- 新萬葉集 上卷 佐佐木信綱編
新萬葉集 下卷 佐佐木信綱編
白萬葉集 上卷 佐佐木信綱編
白萬葉集 下卷 佐佐木信綱編
古事記 幸田成友校訂
古日本書紀 上卷 黒板勝美編
古日本書紀 中卷 黒板勝美編
古語拾遺 加藤玄智校訂
水鏡 和田英松校訂
大鏡 和田英松校訂
三條西榮花物語 三條西公正校訂
伊勢物語 屋代弘賢校訂
竹取物語 附録 島津久基校訂
平家物語 上卷 山田孝雄校訂

- 平家物語 下卷 山田孝雄校訂
源氏物語 (一) 島津久基校訂
源氏物語 (二) 島津久基校訂
源氏物語 (三) 島津久基校訂
土佐日記 池田龜鑑校訂
紫式部日記 池田龜鑑校訂
更級日記 西下經一校訂
枕草子(春曙抄) 上卷 池田龜鑑校訂
枕草子(春曙抄) 中卷 池田龜鑑校訂
倭漢朗詠集 山田孝雄校訂
古今和歌集 尾上八郎校訂
新古今和歌集 佐佐木信綱校訂
新古今和歌集 佐佐木信綱校訂
新金槐和歌集 齋藤茂吉校訂
藤原定家集(附定家年譜) 佐佐木信綱校訂
法華義疏 上卷 聖徳太子御説
法華義疏 下卷 花山信勝校訂
正法眼藏隨聞記 懷和辻哲郎校訂

- 日蓮上人文抄 姉崎正治校注
歎異抄 金子大榮校訂
徒然草 西尾實校訂
方丈記 山田孝雄校訂
申樂談 義書 野上阿彌校訂
花傳書 野上阿彌校訂
奥の細道 その他 伊藤松字校訂
芭蕉七部集 伊藤松字校訂
芭蕉連句集 小宮豊隆編
燕村七部集 伊藤松字校訂
風俗文選 伊藤松字校訂
鶉衣 石田元季校訂
おらが春・我春集 萩原井泉水校訂
俳柳多留 上卷 西原柳雨校訂
俳柳多留 中卷 西原柳雨校訂
俳柳多留 下卷 西原柳雨校訂
萬載狂歌集 野崎左文校訂



德和歌後萬載集	野崎左文校訂	東海道膝栗毛	十返舎一九作	五重	塔幸田露伴著
松の葉	藤田徳太郎校註	加賀	河竹繁俊校訂	風流佛	一口劍幸田露伴著
好色一代男	西田萬吉校訂	赤垣源藏・仲光	河竹繁俊校訂	二人女	房尾崎紅葉著
好色一代女	西田萬吉校訂	忍屋新惣	河竹繁俊校訂	觀音	岩前篇川上眉山著
好色五人女	西田萬吉校訂	孝子善吉	河竹繁俊校訂	觀音	岩後篇川上眉山著
日本永代藏	西田萬吉校訂	鼠小僧	河竹繁俊校訂	にげくり	え種口一葉著
世間胸算用	西田萬吉校訂	實録先代萩	河竹繁俊校訂	うたかたの記	他三篇森鷗外著
西鶴織留	西田萬吉校訂	お静	河竹繁俊校訂	新曲浦島	坪内逍遙著
武家義理物語	西田萬吉校訂	お森	河竹繁俊校訂	新曲赫映	姫島内逍遙著
椿説弓張月上卷	和曲馬場作	鳩の平右衛門	河竹繁俊校訂	運命論者	他二篇國木田獨步著
椿説弓張月中卷	和曲馬場作	小説・戯曲・詩歌・隨筆・評論	源をぢ	源をぢ	他二篇國木田獨步著
椿説弓張月下卷	和曲馬場作	道	櫻の實	櫻の實	他六篇國木田獨步著
國の權三重帷	近松門左衛門作	行	千曲川のスケッチ	千曲川のスケッチ	島崎藤村著
鏡の權三重帷	近松門左衛門作	草	幸福	幸福	武者小路實篤著
會我の會	近松門左衛門作	漾	蒲團	蒲團	一兵卒田山花袋著
心中天の網	和曲馬場作	草	田舎	田舎	教師田山花袋著
胡蝶物語	和曲馬場作	坊	小僧の神様	小僧の神様	他十篇志賀直哉著
浮世風呂	和曲馬場作	つ			
浮世床	和曲馬場作	ち			
浮世漫	和曲馬場作	や			

和解の死	男志賀直哉著	子規歌集	正岡子規著	外國文學(小説・戯曲・詩)	
陸奥直次郎	長興善郎著	左千夫歌集	齋藤茂吉選	杜	詩卷之一 漆山又四郎譯註
青銅の基督	長興善郎著	上田敏詩抄	茅野蕭々編	杜	詩卷之二 漆山又四郎譯註
偷	盜井川龍之介著	晚翠詩抄	土井晚翠著	杜	詩卷之三 漆山又四郎譯註
厭世家の誕生	佐藤春夫著	藤村詩抄	島崎藤村自選	杜	詩卷之四 漆山又四郎譯註
入江のほとり	正宗白鳥著	有明詩抄	蒲原有明著	陶淵明集	漆山又四郎譯註
生まざりしならば	正宗白鳥著	泣菫詩抄	薄田泣菫著	唐詩選	上卷 漆山又四郎譯註
大石良雄	野上彌生子著	文道遙遺稿	笹川臨風譯	唐詩選	下卷 漆山又四郎譯註
海神丸	野上彌生子著	歌舞音樂略史	小中村清矩著	即興詩人	上卷 森鷗外譯
出家とその弟子	倉田百三著	俗樂旋律考	上原六郎著	即興詩人	下卷 森鷗外譯
布施太子の入山	倉田百三著	蘭學事始	杉田元白著	ブ	イブセン作
その妹	武者小路實篤著	茶の本	岡倉覺三著	ラ	ドイブセン作
人間萬歳	武者小路實篤著	綱島梁川集	安倍能成編	ン	角田俊譯
波	山本有三著	清澤文集	清澤瀧之著	幽	曲ストリントベルク作
病牀六尺	正岡子規著	福澤撰集	福澤諭吉著	父	妻ストリントベルク作
墨汁一滴	正岡子規著	北村透谷集	島崎藤村編	稻	小宮豐隆譯
仰臥漫錄	正岡子規著	海舟座談	巖本善治編	令嬢	ユリエストリントベルク作











□番號はただ發行順に従つて之を追ふものであります。

□★★或は★★★は、それぞれ二百頁或は三百頁の本一冊なることを示し、百頁づつの分冊ではありません。

□送料(及び定價)は左表の通りです。

★定價二十錢 送料二錢

★★四十錢 送料四錢

★★★六十錢 送料六錢

★★★★八十錢 送料八錢

★★★★★一圓 送料一圓

□御註文は前金で御願ひ致します。小さい本で極度の廉價なものですから必ず送料はお添へ下さい。切手代用は一割増に願ひます。

◇岩波文庫新刊書目◇

聖徳太子 製	法華義疏	上卷	花山信勝校譯	★★★
歎	異抄		金子大榮校訂	★
増	鏡		和田英松校訂	★★★
枕草子	(春曙抄)	中卷	池田龜鑑校訂	★★★
能作書・覺習條條・至花道書			世阿彌校訂 野上豊一郎校訂	★
註譯唐詩選		上卷(附作者略傳)	漆山又四郎譯註	各★★★
ギユイ社會學上 ヨルより見たる	藝術	第二部下卷	大西克禮譯 小方庸正譯	★★★
フアル昆蟲記		第十四分冊 第二十分冊	林達夫譯 山田吉彦譯	各★★★
生の誘惑(原名イヴェット)			モウパッサン作 前田晁譯	★
ブレイク抒情詩抄			壽岳文章譯	★
メトセラ時代に歸れ			バナアド・シヨウ作 伊集院齊譯	★★★



終

